

昼

前、町中を車で走っていたら、ランドセルを背負った一年生らしき小学生を見つけた。二期期の学校の様子が報じられるだろう。感染防止策を講じて云々といちいち付けて。ただでさえ始業の日は子どもも教員も不安なのに、コロナ対策まで加わるのだから、想像するだけで息苦しさを覚える。ことに気の毒なのは、いずれの校種でも同様だと思うが、一年生二年生だ。感染、閉鎖を想定して授業を進めるのが優先された学校しか知らない。

連想から、貧乏旅行に打ち興じた我が大学一年生を思い出し、様々ながまんを強いられている今の学生に申し訳ない気持ちになりかけた。が思いとどまった。

待て、自分は今、確かに大学一年生でも小学一年生でもないが、リタイア一年生ではある。この二度とないスタート時にこれでもかと足止めを食わせられているのではないか。旅をリズムにすべく画策していたあれこれがスタートラインに着くことさえできないでいるのだ。不遇な一年生同士、くじけまいぞ。

秋田のバス停を出発し、青森に着いた時には午後になっていた。北海道には青函連絡船で行くのだ、という知識はあったが、それだけだったのでカブといえど

もフェリーに乗せなければならぬとは知らず、探し当てるまでにいぶん時間を取ってしまった。窓口に並んでいると、自分の前日までに焼けたトラック運転手が二人、販売員の若い女性に食ってかかっていた。急ぎの輸送なのに切符が取れないでは困る、とまくし立てていた。押し問答の末、諦めた二人がどくと、穴あきアクリル板の向こうで怒気をまとった女性がこちらの言葉を待っていた。

「あいう、北海道に行きたいんですけど。」
「キャンセル待ちの三十四番です。」

さっきの話聞いてなかったんか、あんたは。と言いたげに、番号札を渡そうとする。これでも食らえとばかりの勢いで。えっ、乗れないの、と途方に暮れかけたが、ふと思いついた。

「カブなんですけど。」

女性の顔がはつとする。少し恥ずかしそうに。

「原付ですね。はい。大丈夫です。〇〇円です。」

心細げに突つ立つ十八歳をトラックの運転手と混同するほど乗せる乗せないを繰り返していたのか、気の毒に。

大型トラックがびつしりと並んだフェリーのはしつこに置いた。小さい。見るからに慎ましい。カブでよかったと心底思った。



專業ババ奮闘記 (その2) 65

木幡智恵美

コロナ禍の中で (4)

新型コロナウイルス感染が世界中に広がることになったこの年の幕開け、元日から義母の機嫌が悪かった。圧迫骨折をし、ベッドから起きることもできず、たった一メートルしか離れていない炬燵までの移動にも車椅子を使い何十分もかかる。何もかも人の手を借りなくてはならない生活に自身嫌気がさしていたのだろうか。何を言っても喧嘩腰だ。

移動の補助や排泄の始末は慣れてくればさほど辛くは感じなくなつた。一番心の負担になるのが、「ご機嫌」。「今日はデイサービスですよ」と声を掛けると、「デイサービスなんか行かん」と突っぱねられることがある。夫に代わると、親子で口論になることしばしばで、そういう時は、しばらく放っておくことにした。時間を空けて再び覗くと、「起こしてくれる」から始まり、トイレに連れて行ったり、着替えさせたこととなる。一人になり、自分で何もできないことに気づくのか、それとも、怒鳴つたことをすっかり忘れてしまうのか、よく分からない。いつものように、「ごめんね、世話ばかりかけて」「ありがとうね」という言葉が出る。それでも、今日のご機嫌はどうだろうか朝は胸がどきどきするので、デイサービスのある日は、まずは夫に声を掛けてもらい、「ご機嫌どうだった」と聞いてから部屋に向かうようになった。

そんな不機嫌な日は、デイサービスに行き始めた頃は、月に一度か二度だったのが、だんだん増えてきた。家族だけではない。同じデイサービスに週一回行く近所のSさんにも。いつも繰り返す話を「そうね」と飽きもせず聞いてくださるSさんは、自分が行かない日もうちにきて、義母が出るのを見送ってください。そんなSさんにまで、「来んで」などと言う日が出てきたのだ。見送つた後、Sさんが「もう来ない」と言われるので、「時々ああして機嫌が悪くなることありますけど、Sさんのことを嫌っているわけではないんです」と詫げる。次のデイサービスに送りに来てくださった日には、「今日は何ともしなかつた」とSさん。

デイサービスでも、連絡帳に、「今日はかなりご機嫌が悪く、体操もされませんでした」などある。一体義母の頭の中はどうなっているのだろうか。

30代フリーター やあ、ジイさん。アフガニスタンを20年ものあいだ占領し続けてきたアメリカの傀儡政権がタリバンに倒された。

年金生活者 この軍事超大国に局地戦すら完遂する能力が残っていないことを印象づけたアメリカの敗戦だった。

30代 アメリカはそれを「敗戦」と言わずに「撤退」と呼ぶ。日本が76年前の「敗戦」を「終戦」と言い換えたように。

年金 どちらも負けを認めないごまかしという点では同じだが、「撤退」と「終戦」には大きな違いがある。「撤退」は、いったん引くが、いつかまた仕返しに来るという意味を含んでいる。これに対して「終戦」にはこの戦争を「最終戦争」にしたという願望が込められている。日本国民はおそらく世界で初めて勝利も敗北もない次元を目指した。

30代 アメリカがアフガニスタンに侵攻したのは、当時のタリバン政権が9・11テロの首謀者をかくまっていた的な国家がそれを仕切るようになった。それは市場経済の発展なしには不可能で、ここでは国民の均質性、つまり「平等」が前提となる。そのとき初めて民主制への可能性が生まれる。ただしそれが十分条件でないことは中国が示している。

農業と牧畜が中心のアフガニスタンの社会は、まだその段階には達していない。部族や軍閥が仕切る再分配が依然として多いはずだ。そのため、民衆が切実に「平等」を求める必然性を欠いている。アメリカがどんなに民主主義や人権の価値を説いても、人びとにとってそれが守るべき理念とはならない。頭ではそのよさを理解しても、日常の行動をそれが規定することはない。生活の利害に反すると感じるからだ。

30代 アフガニスタンの権力を握ったタリバンが記者会見で、イスラム法の範囲内で女性の人権を尊重し、国内各派とつながった新政権を樹立すると表明した、と報じられている（8月18日

ことへの報復だけでなく、アフガニスタンを民主化する狙いがあった。年金 日本を占領して民主化した成功体験を引きずるアメリカはその点で76年前からほとんど進歩していない。

日本で曲がりなりにも民主化に成功したのは、当時の大日本帝国がすでに近代的な中央集権国家になっていたからだ。民主制は国民の「平等」を前提とする。「平等」が成り立つには権力が国家に集中していることが必須の条件となる。権力が社会の諸勢力、諸階層に分散していた封建社会では「平等」はあり得なかった。人びとは帰属する諸勢力、諸階層によって「不平等」を宿命づけられていた。

部族や軍閥が権力を持つアフガニスタンも同様だった。そこへタリバンはイスラム法もとの「平等」という理念を持ち込み、中央集権国家の建設を目指し始めた。その途上で9・11テロが起きた。アメリカがタリバン政権を倒したあとに残ったのは、権力の分散したままの以前の社会だった。

朝日新聞夕刊）。

年金 国家の台所の苦しさを告白した会見と見ることができ。

アフガニスタンは国家予算の7、8割を国際支援に頼っていて、国家の主要機能である富の再分配を単独で実行できない現状にある。西側先進国の意向に逆らってばかりいては国家としての機能を果たせなくなることは目に見えている。

それでも民主化を進めようとするば、民主制を装った傀儡政権を武力で維持するほかない。アメリカの「敗戦」は論理的にはあらかじめ決まっていた。

30代 アメリカがアフガニスタンを民主化しようとして失敗したのは、民主主義をどんな歴史段階の社会でも有効な普遍的なシステムと勘違いしていたからではないか。論理的にはそう考えていなくても、願望が勘違いを生むことがある。

年金 どんな国家も民衆の支持がゼロでは存立しない。支持を得るには民衆の望んでいることをかなえなければならぬ。代わりに国家は自らの望んでいることを民衆に強制する。その仕組みが富の再分配にほかならない。

再分配は歴史段階によって規模と方法が異なる。封建制の社会ではそれを現在の国家より狭い領域内で領主が仕切っていた。近代以降はそれよりはるかに広い領域、民衆どうしが互いに顔を知らないような広い領域で中央集権

人権の尊重、とりわけジェンダーフリーと専制主義批判は、いま欧米諸国が最も重視し、他国にも求める理念のひとつだ。女性を迫害したり、タリバンの単独支配を強行したりすれば、それに逆らうことになる。

それは先進国に富の再分配を助けてもらわなければやっていけない国家の政府としては（少なくとも露骨には）できないことだ。人権にうるさいことを言わない中国やロシアに頼るだけでは先立つものは足りないだろう。

アフガニスタンのGDPは9・11テロの翌年の2002年から2021年までの間にアメリカなどのあと押しを受けて3倍近くに増えた。女性の労働力なしには維持できない規模に膨れたと推定できる。

女性の医療スタッフに今まで通り仕事をするように話すタリバン関係者の映像を報道官がツイッターに投稿していたのは、イスラム法の厳格な適用が不可能になった現実を彼らが認識している証左と言える。

ニュース日記 797
中村 礼治

アメリカの敗戦